

道具主義と仮定の現実性

M・フリードマン「実証経済学の方法論」の意義

Instrumentalism and the Realism of Assumptions

原谷直樹
Naoki Haraya

1 序論

経済学説を巡る論争において、これまで大きな論点の一つになっていたのが、理論における仮定の性質、とりわけ非現実性に対する方法論的態度であった。本稿の目的は、経済理論における仮定の性質について、特にフリードマンの論文「実証経済学の方法論」¹⁾（以下 F53 と表記）とそれに対する解釈と評価を巡る議論を再検討することにより、何らかの規範的、あるいは方法論的指針を提出することにある。本稿の構成は以下のようなになる。まず第二節において、仮定の非現実性を巡る基本的な対立の構図を示したうえで、本稿における F53 検討の射程と方法を明らかにする。次に第三節では、現在までに提示された様々な F53 の解釈と評価のうち、代表的なものを取り上げ、それらの妥当性について F53 のテキストと照応させながら検討を行う。最後に、第四節においては、仮定が持ちうる多様な役割という視点を提案したうえで、F53 への暫定的な解答と今後の課題を提示する。

2 仮定の現実性と理論の正当性

経済理論、とりわけ現在の主流派である新古典派経済学に対して、繰り返し指摘され批判の対象となってきたのが、理論で用いられる仮定の非現実性であった。確かに新古典派理論においては、効用最大化原理や完全情報の仮定に代表されるように、多くの反直感的な仮定が置かれ、それらを基に理論が構成されていると言えよう。これらの諸仮定は、現実の人間の主観的、客観的認識からして誤りであり、実在する人間の意図、能力、性質をそのまま記述してはいないという意味において非現実的である。しかし、仮定の非現実性を指摘するということは何故、そうした仮定を含む理論に対する批判になりうるのだろうか。言い換えれば、仮定の非現実性はどのようにして問題とされるのであろうか。この点については、実は批判者の側でも完全に見解が一致しているとは言いがたい。

まず考えられるのが、理論を構成する諸仮定は全て現実的なものにすべきであるという批判である。これは理論が完全に現実の正確な記述となるべきという主張であり、ある理論に非現実的な部分が含まれることはその理論の不完全性を意味することになるので、発見され次第、現実に対応する記述に置き換えられるべきであるとされる。したがって理論の仮定においても、それがいかなる仮定であれ、現実的になればなるほど良い理論になると考えられるのである。しかしながら、どれだけ詳細な記述を試みても現実世界を逐語的に言及し尽くすことは不可能である以上、こうした立場においては、いかなる理論も常に不完全であり、修正を迫られていると言えよう。